

ハンドボールにおけるシュート決定率を向上させる要因の検討

－ 一次速攻のノーマークシュートに焦点化して －

永井 莉久（鹿児島大学）

1. 目的

本研究の目的は、一次速攻におけるノーマークシュートに焦点化し、様々な要因を検討することでシュート決定率を向上させる実践的な知見を見出すことである。

2. 研究方法

1) 対象者：K大学男子ハンドボール部員 12 名（うち、ゴールキーパー2名）

2) 調査方法：疑似的に作り出した一次速攻におけるノーマークシュートの場面での試技を行わせ、シュートタイミング、キーパーの間合い、シュートコース、競技レベルの要因について検討した。

3) 分析方法：集団間の比較は等分散を仮定した二標本による t 検定を行い、有意水準は 1% とした。また、シュートコース出現率及びシュート決定率は、平均値±0.5 及び、±1.5 標準偏差で 5 段階に区分した。

3. 結果と考察

1) シュートのタイミングについて

「ランニング」「最高到達点」「着地寸前」のタイミングによるシュート決定率は、57.50%、72.50%、72.50%であり、それぞれの間に有意な差は認められなかったが、「ランニング」のタイミングでのシュートはやや低値を示す傾向がうかがわれた。

2) キーパーの間合いについて

キーパーが「初期位置でセーブ」「シューターとの距離を詰めてセーブ」した場合によるシュート決定率は、65.00%、70.00%であり、有意な差は認められなかったことから、キーパーの間合いによってシュート成否に影響が出る可能性は低いと考えられた。

3) シュートコース別の出現率について

シュートコース別の出現率は、a : 12.50%、b : 10.83%、c : 16.67%、d : 15.83%、e : 10.83%、f : 17.50%、g : 5.83%、h : 10.00%であった。

両腕を広げたゴールキーパーの左右両下である c や f へのシュート出現率が高値であった。また、顔上または顔横、股の下である g や h などの身体付近へのシュート出現率は低値であった。

4) シュートコース別の決定率について

シュートコース別の決定率は、a : 66.67%、b : 46.15%、c : 80.00%、d : 68.42%、e : 38.46%、f : 80.95%、g : 62.50%、h : 75.00%であった。図1は、シュートコース別の決定率を5段階の色分けで示したものである。両腕を広げたゴールキーパーの左右両下である c、f、および股下である h への決定率が高値であった。また、左右の脇下など両腕が最も届きやすい位置である b や e へのシュート決定率は低値であった。

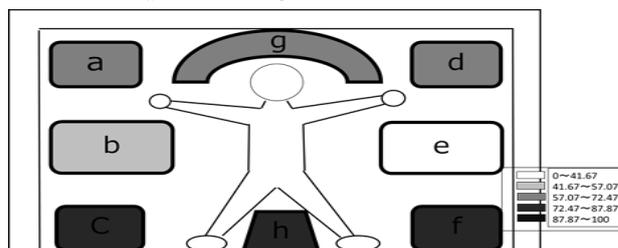


図1. シュートコース別の決定率

5) 競技レベルによる決定率の違いについて

「ほぼ出場なし」「交代出場」「主力」の競技レベルの異なる選手間におけるシュート決定率は、68.75%、58.33%、75.00%であり、それぞれの間に有意な差は認められなかった。よって、一次速攻のノーマークシュートの成否には競技レベルが関与する可能性は低いことが示唆された。

4. 結論

一次速攻のノーマークシュート決定率を向上させる要因は、シュートコースであり、ゴール下方へのシュートが最も効果的であることが示された。

また、「ランニングシュート」よりは、「最高到達点」や「着地寸前」のシュートタイミングの方が、決定率が高い傾向もうかがわれた。